

文化パラダイムと日本の発達心理学

宮川 充司

Culture Paradigm and Developmental Psychology in Japan

Juji MIYAKAWA

はじめに

近年「発達と文化」という、一見きわめてシンプルな2つのキーワードの組み合わせが日本の発達心理学サイドでは大きな関心を喚んでいる。しかし、「文化」という概念が心理学に持ち込まれた歴史は古く、実験心理学の創始者 Wundt (1921) の民族心理学までさかのぼるが、その民族心理学という用語を Von Fumbolt (著名な Von Fumbolt 兄弟の兄で、外交官にして言語学者、ベルリン大学の創設者) が導入したのはさらに100年さかのぼる19世紀初頭のことであった (Cole, 1996) という。

いわば近年の心理学における文化ブーム、つまり文化心理学 (cultural psychology) は、突然出現したのではなく、本質的には文化パラダイムの再考・復権である。そのブームの中核に L. S. Vygotsky の文化-歴史的アプローチの影響を受けた Cole (1988, 1996)、あるいは社会心理学領域とりわけ自己概念研究において大きなインパクトとなってきた Markus & Kitayama (1991)、北山 (1997) たちの文化心理学の影響があることは否定できない。

北山の文化心理学が脚光を浴びる以前、筆者は日本の心理学者の研究における一般的な研究姿勢、アメリカ (ないし欧米) 至上主義による文化的脈絡を無視した安易な直輸入翻訳研究の不毛性を指摘し、物議を醸したことがあるが (宮川, 1990)、当時はまだ少数意見にすぎなかった。文化的コンテクストを重視すべきであるという今日の文化心理学の主張とほぼ同じ主張であり、まさに今昔の感をぬぐえない。

しかし、近年の心理学における文化ブームは文化心理学の影響によるとしても、心理学における文化パラダイム重視は、決して近年の文化心理学の登場によって達成されたわけではない。むしろ、それ以前から着実に研究実績を積んできた H. C. Triandis や星野命に代表される異文化間心理学 (Cross-cultural Psychology) の研究の流れの方にこそ、求められるべきだろう。たとえば、心理学におけるイーティック (Etic: 文化普遍的な) 問題とイーミック (Emic: 文化固有的な) 問題の区別の重要性を指摘したのは、異文化間心理学サイドである。蛇足だが、星野 (1997) が指摘していることであるが、大変不思議なことに、日本では長年異文化間心理学の研究に携わってきた研究者は、Cross-cultural Psychology を「異文化間心理学」という定訳を用い、その流れを知らない文化心理学ブームに乗って

いる研究者たちは「比較文化心理学」という訳語を用いる傾向がある。

とりわけ、発達心理学領域での文化パラダイムの再考の背景には、1960～70年代に発展した比較文化的研究の成果、あるいは異文化間心理学サイドでなされた発達研究の成果が、実際上の大きな影響を与えてきたものである。

この関心領域とその背景について、学会動向を概観し、大まかな理論的枠組みを構築していくことが、本稿の課題である。しかし、この課題は、非常に複雑で、実に重たい困難な課題である。執筆スペース等の制限内でこの課題を充分達成できるとは考えていないが、せめて「日本の発達心理学と文化」がかかわる諸問題や学会動向を整理し、大まかな方向づけをしてみたい。

文化心理学ブーム

1996年には M. Cole の “Cultural Psychology” という本が出版され、2002年にはその邦訳本『文化心理学』（天野清訳）が出版された。偶然にしてはできすぎているが、1997年に文化心理学（Cultural Psychology）というキーワードを使用した本が3冊、国内で出版された。

波多野誼余夫・高橋恵子著『文化心理学入門』（岩波書店）

北山忍著『自己と感情——文化心理学による問いかけ』（共立出版）

柏木恵子・北山忍・東洋編著『文化心理学——理論と実証』（東京大学出版会）

これは勿論、近年脚光を浴びてきた文化心理学の人気を反映しているが、それにしても近年の文化心理学をめぐる動きは実に素早いという他はない。

「文化心理学とは、心と文化が歴史、発達といった継時的ダイナミックスのなかで相互に構成するプロセスに注目する学際的分野である。(p. 36)」(北山, 1997a)

文化心理学の1つの定義としては、非常にわかりやすいシンプルな定義である。

文化心理学は、比較文化的な研究の発展と、文化普遍的な一般法則の発見のみに偏向していた心理学の一般動向の反省から近年新しく生まれたという。

しかし、文化心理学と後にふれる異文化間心理学の区分は、文化心理学者が主張している程には、それぞれの扱っている内容を考えるとそれほど境界は明確ではない。いずれにせよ「文化」というキーワードを理論的主軸に、さまざまな側面で文化差や文化固有的な現象の解明に期待されていることは確かであろう。

文化の定義

「文化という用語を、簡単に定義してみて下さい」という課題を出したとしよう。「これは、一言で定義できるような簡単なものではない」とか、あるいは「文化とは、所定の社会・集団の中でその構成員により共有されている行動様式・価値観のことである」といっ

たような一見もつもらしい形式的定義を出すことも可能であろう。しかし、こと「文化」という用語について心理学関連領域で「文化」の定義ということになると、議論はそれほど簡単ではない。

たとえば、異文化間心理学の代表的な理論家 Triandis (1980) は、文化を物質文化 (physical culture)、主観文化 (subjective culture) に分類している。物質文化は、道路や見物、道具のようなものであり、主観文化は価値や態度、役割のように人間によってつくられた主観的反応であるとしている。主観文化は、「社会的環境に対するある文化集団特有の知覚の仕方」とも説明されている (渡辺, 2002)。

波多野・高橋 (1997) は、文化心理学を「文化と心の相互関連を扱う学際的科学である」と定義し、3つのアプローチがあるとしている。第一は、文化を「ある程度、自覚的・永続的な集団の慣習、伝統、実践、さらに共有された意味や視点」ととらえ、それとその集団に属する人々の心の側面との対応関係を明らかにしようとするもの。第二は、文化を個人を取り巻き、たえず相互交渉をする他者および人工物の全体とするアプローチである。第三は、文化をむしろ人々にある見方を強制し、その外界の認知をゆがめるものとしてとらえるアプローチである。

文化にはさまざまな定義が存在している。最近ではよく知られている「石器文化を持つ野生チンパンジーの群れがいる」という知見は、文化とは何かという問題を考えるには非常によい材料であるが、研究者間で共有された「文化」の公式定義の確立はもう少し先のことと期待して、筆者は現状では当面曖昧なメタ定義レベルでよいと考えている。

異文化間心理学 Cross-cultural Psychology

文化心理学者たちが、比較文化心理学と呼んで、理論的考察を軽視している、イーミックな事象を考慮していない、労多くして益なし、といった類のむしろ批判の対象としている一連の研究は、もっぱら1960～70年代にかけて盛んに研究がなされた比較文化的研究に集中している。

この年代の著名な研究としては、たとえば Segall, Cambell, Herkovitz (1966) の幾何学的錯視 (ミュラー・リヤーと水平垂直錯視) を用いたヨーロッパ人・非ヨーロッパ人 (アフリカ・フィリピン) の比較文化的研究、Berry (1976, 1991) による Witkin の場依存性-場独立性認知様式 (スタイル) の測度 (EFT・RFT) と育児習慣の質問紙による比較文化的研究などは、異文化間心理学領域のうち、特に比較文化的研究としてよく知られているものである。

しかし、文化心理学者による比較文化的研究への批判は必ずしも当たっていない。また、文化心理学者が批判の対象としていない、異文化間心理学の別の主要な研究領域に、カルチャーショック、異文化間ストレス・異文化不適応、バイリンガリズムなどのキーワードにより知られている領域がある。この領域では、実践的研究が多いのは確かであるが、理論的考察の欠如という批判が当たってないというより、逆の理論乱立といった方が当たっている状況がある。

Triandis (1975, 1980, 1994) の認知主義的なカルチャー・ショック論 (言語・対人的ネットワーク・立場・共通目標といった類似性の知覚と接触機会の相互作用理論)、Triandis

(1995)の個人主義-集団主義および垂直-水平(人間関係)理論, 渡辺(1980, 2002)の統合的カルチャー・ショック論(身体・知覚・思考・感情・実存の5領域の相互作用的なカルチャー・ショックのモデル), 大西(1992)異文化ストレス症候群, 秋山(1992, 1998)の異文化間適応障害, 山本(1996)のバイリンガリズムの形成過程理論などいずれも優れたものである。

日本の発達心理学と「文化」、比較文化的研究

近年, ○○の日米比較研究, 日中比較研究, 日韓比較研究といったさまざまな比較文化的な発達研究が蓄積されてきている。こうした日本における比較文化的な発達研究が促進されるきっかけとなったのは, 1960~70年代にかけて発達研究と育児文化の問題への関心が広がった比較文化的研究がある。一つは, 添い寝というような日本の育児習慣に関心を向けさせた Caudill & Weinstein (1969) の日米の母子関係の比較研究。もう一つは, 1972年から約10年間にわたって行われた一連の日米母子研究であった(東, 1994; 東・柏木・ヘス, 1981)。この大規模な研究プロジェクトは, さまざまな新しい知見をもたらした。日本の母親は, 感情のコントロールができ従順で礼儀正しいことを子どもの発達で重視するが, アメリカの母親は社会的スキルが高くて自己主張のできることを重視する。日本では, 幼児期のIQや熟慮性や粘り強さといった行動特徴が小学校高学年での学業成績を予測するが, アメリカでは幼児期の独創性といった行動特徴が後の学業成績を予測する(Kashiwagi, Azuma, Miyake, Nagano, Hess, & Holloway, 1984) ことなど。この一連の研究が一種の起爆剤となり, 日本の発達心理学サイドにおける比較文化的研究あるいは比較文化的な視点を踏まえた研究が盛んになっていった。

その他, 同画探索検査(MFFT)の得点に関する日・米・イスラエルの幼児・児童の発達比較(Salkind, Kojima, & Zelniker, 1978)。Ainsworthのストレンジ・シチュエーションで測定した子どもの愛着タイプの日米独比較(三宅, 1990)など, それなりの着実な研究成果をもたらしたものが少なくない。

異文化間発達心理学 Cross-cultural Developmental Psychology

異なる文化間移動の移動が少なかった時代はともかくも, グロバリゼーションとか多文化社会の進行してきている現代の日本にあっては, 生まれた文化圏の中で一生を終えるという考え方は, 実情と合わなくなった。大なり小なり一生のどこかの段階で異文化接触(カルチャーショック)体験をもつということが, 当たり前のような時代となってきた。異文化接触に関わる問題は, 海外への転居は勿論, 短期の海外旅行でも体験されることであるし, 外国人居住者の目立ってきた(国内の)地域・職場・学校では, 国内にいながらほぼ日常的に異文化接触体験にさらされている。こうした問題を取り扱うのが, 異文化間心理学であるが, 子どもの異文化移行体験や多文化・多言語獲得の問題を取り扱う研究が増えてきている。

アメリカに転居した日本人の子どもたちに関して, アメリカ文化の体得のタイプを異文化移行の年齢や滞在年数から分析した箕浦(1984, 1990)の理論は, 子どもの異文化獲得過

程の理論としては、非常に影響力のあったものである。さらに、箕浦（1997）は、文化的移行、特に帰国児童・生徒の文化的再適応に関する生態学的モデルを発展させている。その他、日本の保育園や幼稚園で受け入れた外国人乳幼児の事例研究（宮川、1989, 2001, 2002）などは、子どもの異文化適応（文化獲得）にかかわる現象と理論を取り扱っている。

これらは、子どもの異文化間移動・適応に関する新しい発達心理学領域への方向性を示している。

民俗心理学的な発達研究

もう一つ文化心理学者が、あまり関心を払っていないとはいえないが、文化との関係で重要なものに、日本民俗学的な資料の発達研究がある。

日本の育児文化の伝統を、古い時代の育児書、16世紀末～17世紀初頭頃に描かれた熊野観心十界曼荼羅（図）といった宗教民俗学的な資料、幕末の桑名・柏崎日記などから分析した小嶋（1989）の「子育ての伝統を訪ねて」。さらにエイジングやライフコースといった生涯発達の民俗学的資料の日本とヨーロッパの比較分析（小嶋、2001）など、民俗心理学的な発達研究を発展させた「心の育ちと文化」。

16世紀末～17世紀初頭頃に描かれた熊野観心十界曼荼羅（図）は、約400年前の日本人の生涯発達観を知るためには、非常に貴重な民俗心理学的な資料である。その時代に遊行旅芸人の熊野比丘尼たちが、各地を用い歩いて絵解きに使用したといわれているものである。この熊野観心十界曼荼羅は秋田から岡山まで30数枚現存しているといわれ、手書きであるため少しずつ図柄の細部に差異があるが、共通しているのが上半分に、人の一生を描いた人間界と天界、仏界・菩薩界・縁覚界・声聞界の4聖道ともよばれる世界と、中央に心字と施餓鬼壇が描かれている。下半分に、四悪趣の世界、地獄・畜生・餓鬼・修羅が詳細に描かれていて、特に地獄界が詳しく描かれている。男の地獄としては、源信の『往生要集』にも記述のある「刀葉林」という女性を苦しめた男性が落ちる地獄。女の地獄として、産まず女（石女）地獄、血の池地獄（中世に日本に伝えられた道教的色彩の強い地獄で、道教では「血湖」といい元々は出産で死亡した女性が落ちる地獄とされた）。嫉妬に狂った女性がともに落ちるともいわれている両婦（ふため）地獄など、さまざまな地獄が描かれている。

十界のうち特に人間界を描いた部分は、「老いの坂」とも呼ばれ、約400年前の日本人がもっていた人の一生のイメージ、上り坂と下り坂のイメージが現代人のもっているものと同様なものであったことがわかる。また、人の一生は死をもって終わるのではなく、この世とあの世が何らかの連続性・循環性をもったものとして描かれている。これも、ごく最近まで日本人がもっていたもので、単に日本というより東アジア共通にもたれていた仏教儒教道教の融合した宗教観・あの世観がこうした絵画資料から読みとれるのである。

こうした文化固有的と考えられている民俗学的な資料を、科学的心理学の立場から客観的に取り扱っていく視点は重要であるが、日本文化固有と考えられているものであっても、欧米との比較のみから、はじめから日本の独自文化と決めつけて取り扱うのは、重要な側面を見逃してしまうことが考えられる。共通性の基底文化をもち伝統文化において類似性が高い韓国との比較は最終的には不可欠であろう。たとえば、宗教民族学者の西山（1994）



西福寺（京都市）所蔵 「熊野観心十界曼荼羅」（2002年8月9日筆者撮影）

は、この熊野観心十界曼荼羅は、文禄・慶長の役で略奪され桃山時代に日本に持ち込まれた李朝本「甘露帳」（施餓鬼図）の影響が強いのではないかという指摘を行っているが、その仮説が正しいかどうかは今後の検証課題としても、こうした比較文化的視点が重要であることは確かであろう。

付記：この論文は、2002年8月29日大阪人間科学大学を会場に開催された、学会連合臨床発達心理士認定委員会主催の第3回認定講習会、発達臨床心理学概論：基礎理論「発達と文化」で筆者が行った講義のための配付資料を加筆したものである。

引用文献

- 秋山剛（1992）異文化における適応と精神障害 渡辺文夫・高橋順一（編）地球時代をどう捉えるか——人間科学の課題と可能性 ナカニシヤ出版
- 秋山剛（1998）異文化間メンタルヘルスの現在 秋山剛（編）こころの科学（特集：異文化とメ

- ンタルヘルス) 77, 14-22 日本評論社
- 東洋 (1994) 日本人のしつけと教育 東京大学出版会
- 東洋・柏木恵子・R. D. ヘス (1981) 母親の態度行動と子どもの知的発達 東京大学出版会
- Berry, J. W. (1976) *Human Ecology and cultural style*. New York: Sage-Halstead.
- Berry, J. W. (1991) Cultural variations in field dependence-independence. In S. Wapner & J. Demick (Eds.), *Field dependence-independence: Cognitive style across the life span*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Association Publishers. Pp. 289-308.
- Caudill, W., and Weinstein, H. (1969) Maternal care and infant behavior in Japan and America. *Psychiatry*, 32, 12-43.
- Cole, M. (1988) Cross-cultural research in the sociohistorical tradition. *Human Development*, 31, 137-151.
- Cole, M. (1996) *Cultural Psychology: A once and future discipline*. Cambridge, MA: Belknap Press, Harvard University Press. [天野清訳(2002) 文化心理学——発達・認知・活動への文化・歴史的アプローチ 新曜社]
- 波多野諄余夫・高橋恵子 (1997) 文化心理学入門 岩波書店
- 星野命 (1997) 文化心理学の位置づけ 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学——理論と実証 東京大学出版会, Pp. 71-75
- 北山忍 (1997a) 文化心理学とは何か 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学——理論と実証 東京大学出版会, Pp. 17-43
- 北山忍 (1997b) 自己と感情——文化心理学による問いかけ 共立出版
- Kashiwagi, K., Azuma, H., Miyake, K., Nagano, S., Hess, R. D., & Holloway, S. D. (1984) Japanese-US comparative study on early maternal influences upon cognitive development: A follow-up study. *Japanese Psychological Research*, 26, 82-92.
- 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) (1997) 文化心理学——理論と実証 東京大学出版会
- 小嶋秀夫 (1989) 子育ての伝統を訪ねて 新曜社
- 小嶋秀夫 (2001) 心の育ちと文化 有斐閣
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991) Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
- 箕浦康子 (1984) 子どもの異文化体験——人格形成過程の心理人類学的研究 思索社
- 箕浦康子 (1990) 文化の中の子ども 東京大学出版会
- 箕浦康子 (1997) 文化心理学における〈意味〉 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学——理論と実証 東京大学出版会, Pp. 44-63.
- 宮川充司 (1989) アメリカの子どもが日本の幼稚園に 小嶋秀夫 (編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣, Pp. 141-164.
- 宮川充司 (1990) パーソナリティ研究この1年 教育心理学年報, 29, 64-71.
- 宮川充司 (2001) 保育現場での異文化接触 やまだようこ・サトウタツヤ・南博文 (編) カタログ現場心理学——表現の冒険 金児書房, Pp. 104-111.
- 宮川充司 (2002) 子どもの異文化接触と保育現場 日本発達心理学会 (企画), 柏木恵子・藤永保監修, 藤崎眞知代・本郷一夫・金田利子・無藤隆編著 育児・保育現場での発達とその支援シリーズ/臨床発達心理学 第5巻 ミネルヴァ書房, Pp. 257-265.
- 三宅和夫 (1990) 子どもの個性——生後2年間を中心に 東京大学出版会
- 大西克 (1994) 地獄を絵解く 網野善彦 (編) 職人と芸能——中世を考える 吉川弘文館, Pp. 2225-263.
- 大西守 (1992) 異文化ストレス症候群 バベル・プレス
- Salkind, N. J., Kojima, H. & Zelniker, T. (1978) Cognitive tempo in American, Japanese, and Israeli

- children. *Child Development*, **49**, 1024–1027.
- Segall, M. H., Cambell, D. T., Herkovitz, M. J. (1966) *The influence of culture on visual Perception*. Indianapolis, IN: Bobbs-Merrill.
- Triandis, H. C. (1980) Reflections on trends in cross-cultural research. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **11**, 35–58.
- Triandis, H. C. (1994) *Culture and social behavior*. New York: McGraw-Hill.
- Triandis, H. C. (1995) *Individualism and collectivism*. Boulder, CO: Westview Press. [神山貴弥・藤原武弘編訳 (2002) 個人主義と集団主義——2つのレンズを通して読み解く文化 北大路書房]
- 渡辺文夫 (2002) 異文化と関わる心理学——グローバル化の時代を生きるために セレクション社会心理学22 サイエンス社
- 山本雅代 (1996) バイリンガルはどのようにして言語を習得するのか 明石書店

(文学部 教養教育等)